



Title	1950年代の丹下健三の著作にみる伝統論の変遷
Author(s)	羽藤, 広輔
Citation	デザイン理論. 2026, 88, p. 7-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106184
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1950 年代の丹下健三の著作にみる伝統論の変遷

羽 藤 広 輔

キーワード

丹下健三, 伝統論, 伝統論争, 桂離宮, 縄文

Kenzo Tange, Theory of Tradition, Dispute about Tradition, Katsura Villa, Jomon

1. 研究の目的と背景
2. 1950 年代伝統論争と既往論考
3. 言説の系統的整理
4. 1950 年代の丹下健三の伝統論の変遷
5. おわりに

1. 研究の目的と背景

本研究は、1950 年代における丹下健三（1913-2005）の伝統論の変遷について明らかにするものである。1950 年代の伝統論争は、当時の建築家たちが、主に『新建築』誌上で、伝統と創造の問題についてそれぞれの主張を展開したものであり、丹下はその中心人物とみなされてきた。弁証法的な創造論や、揺れ動いた桂離宮への評価等、これまで度々取り上げられてきたが、その論旨の変遷に関する詳細な研究は報告されていない。よって本研究では、多様な論旨の展開があった 1950 年代の丹下の言説を網羅的に調査することにより、同時期の丹下による伝統論の変遷を明らかにする。

研究の方法について、まず第 2 章で、1950 年代の伝統論争の概要と既往論考を確認する。第 3 章では、1950 年代に丹下健三名義で発表された著作を網羅的に調査し、伝統論すなわち伝統に関しての主張が見られる言説を抽出し、これを論旨ごとに分類し、時系列に整理する。第 4 章では、そのうち注目すべき変遷が見られた論旨について、詳細に検討する。以上の方法をもって本研究を進める。

2. 1950 年代伝統論争と既往論考

2-1 1950 年代伝統論争の概要

1950 年代の建築界における伝統論争は、主に、川添登が編集長を務めた『新建築』誌にお

本稿は、第 67 回回匠学会大会（2025 年 8 月 28 日、京都女子大学）での発表にもとづく。

いて、建築家たちが、伝統と創造の問題についてそれぞれの主張を展開したものであり、丹下の作品と論考が掲載された1955年1月号を境に議論が活発化した。代表的な著作とみなされているのが、「現在日本において近代建築をいかに理解するか——伝統の創造のために——」（『新建築』1955年1月号／以下「55年1月論文」）および「現代建築の創造と日本建築の伝統」（『新建築』1956年6月号／以下「56年6月論文」）であり、丹下の建築表現論が伝統との関連の中で語られた。56年6月論文では具体的に日本建築の伝統の流れを考察し、「わび」・「さび」・「風流」といった消極的伝統のあり方の自覚・克服を訴えた上で、55年1月論文でも示されていた「美しきもののみ機能的である」の主張が、より伝統と関連をもった形で説明された。その他、多くの建築家や評論家によって論争が展開される中、新たな視点を提示したと考えられているのが白井晟一の「縄文的なるもの」（『新建築』1956年8月号）であり、縄文・弥生の対比による伝統理解の構図を示した上で、江川氏旧葦山館を「縄文的なポテンシャルを感じさせるめずらしい遺構」とであると評価した。後に、丹下が「弥生的なもの」と「縄文的なもの」の関係から伝統を捉えようとしたのが、1960年の写真集『桂日本建築における伝統と創造』（造型社／以下、『桂』）に掲載された論考「日本建築における伝統と創造—桂」（以下、『桂』論文）である。ここでは、「伝統と破壊のディアレクティクな統一が、創造の構造である」とし、「この上層文化の系譜と下層のエネルギー、弥生的な文化形成の伝統と縄文的文化生成のエネルギーとが、ここで伝統とその破壊として、ディアレクティクに燃焼しあうことによって、この桂の創造はなしとげられたとみてよいだろう」とした。

2-2 既往論考

まず、1950年代の伝統論争の総括として、藤岡洋保の論考¹が挙げられる。ここでは同論争について、1930年代のモダニズム的伝統理解が基礎となったが他に、「民衆」の視座への共感、「空間」による伝統の把握、「縄文的なもの」への関心の3つが新たに登場したと総括している。また上述の1930年代の伝統理解では、平面と構造の簡素・明快さ、素材の美の尊重、無装飾、左右非相称、環境との調和、規格の存在の6つが継承すべき要素に挙げられたとしている。

次に丹下の伝統論に関するものを見ていく。まず、豊川斎赫の一連の研究が挙げられる。特に「丹下健三による桂離宮のための空間論」（2021）²では、丹下の『桂』の製作前の伝統理解について、神々の尺度、禪に対する評価、内的リアリティに基づく桂離宮評価等の点から触れている。また、『群像としての丹下研究室』（2012、オーム社）では、岡本太郎とイサム＝ノグチとの対比から丹下の特徴に触れ、ノグチとの対話について次のように説明した。

主体的に世界史を担う民族の建築として戦後の日本に民家は似つかわしくない、という羞恥心に苛まれた。この羞恥心を克服すべく、丹下は『桂』において日本社会の克服すべき階級対立を見出し、また『伊勢：日本建築の原型』において日本列島が南北二つの文化が混淆し止揚する場としてみなした。こうした歴史解釈を通じて、丹下は揺るぎない建築の核心を自らの内面に築こうと試みた。

田路貴浩らによる「丹下健三の伝統論 その1」および「同 その2」(2008)³では、7件の著作を取り上げながら、丹下の1950年代の伝統論を、伝統を介した「典型」の創造という方法論の定式化から、創造の原点としての伝統に対する「感動」の自覚への深化として捉えている。

日直彦は『日本近現代建築の歴史』(2021, 講談社)において、丹下の桂離宮論が揺れ動いた点を指摘しつつ、最も筋の通った主張は、「日本＝モダニズム神話」を克服しようとするものだったとした。

磯崎新は『建築における日本的なもの』(2003, 新潮社)において、弥生と縄文の文脈を、占領下からサンフランシスコ講和条約締結さらにはそれに基づく安全保障条約への反抗という流れから捉え、丹下の『桂』はその政治的状況のシフトに歩調を合わせているとしつつ、岡本太郎の「爆発」と対比させながら、「結局のところ丹下健三は弥生的で静的な構築を枠組みとして守る役割をになわされる」とした。

藤森照信は、『丹下健三』(2002)⁴の「第8章 柱梁の系譜」において、丹下が日本の伝統を“縄文的になるもの”と“弥生的なるもの”の交差として理解するようになる経緯について触れつつ、本当に注目すべきは、伝統にかこつけて語られた建築表現論であり、55年1月論文と56年6月論文が該当するとした。

以上のうち、藤岡と田路らの例が本研究の視点に近く、また学術研究でもある。しかしながら、これらの研究では、資料範囲が限定的または不明瞭であり、また注目すべき論旨の抽出方法についても、客観性を確保できているとは言い難い。こうした点を踏まえ、本研究では、公刊された1950年代の著作のうち、丹下の単著と確認できたもの全てを対象とし、伝統論に該当する言説を網羅的に取り上げ、プロセスをオープンにしながら、これを論旨ごとに、時系列に整理することによって、丹下の伝統論の展開を一覧に把握し、その上で、個別の論旨の変遷の経過を詳細に明らかにする。

3. 言説の系統的整理

3-1 整理の方法

本研究では、1950年代の丹下の著作、合計112件（表1と別表1を合わせたもの）⁵を対象資料とする。その内、伝統に関する主張を含む言説について、引用文6-1～108-1を抽出した（別表2／同一の著作から同じ論旨の引用文を複数抽出しない。引用文番号の頭の数字は、表1の資料No.に対応させている。）尚、紙幅の都合上、引用文について、本文で引用したもの以外は、掲載箇所のみ記載した。

また分類は、2-2に示す藤岡の総括において30年代および50年代に形成とされた9つの内容を規準とし、丹下の伝統論を論旨ごとに分類する。また、藤岡の総括に見られない内容は、丹下独自の言説と位置付ける。以上の方法をもって、分類を行った結果、43の論旨（あ～ろ）に分類することができ、表1が得られた⁶。

3-2 結果の分析

事例数として最も多かったのが、〈伝統と技術／ソーシャル・リアリズムとモダニズムによる対比的理解〉（え）であり、主に1950年代の前半に見られ、丹下の弁証法的伝統論の端緒となった。それに次ぐ〈対決し克服すべきもの〉（め）としての伝統理解は、逆に1950年代後半に見られ、丹下の同時期における伝統に対する基本的な姿勢として理解できる。その他、〈形式的な伝統表現の否定〉（し）は、伝統的なものを内容への評価なく形だけで取り入れることを批判したものであり、比較的、時期の偏りなく見られた論旨であるが、他の建築家にも多く見られるものであり⁷、同時代の建築家に共有された基本的な考え方と言える。また、桂離宮に関連して、〈身辺的認識からでた「生活の知恵」の否定〉（は）、〈自然に対抗する人間の意志〉（ほ）の重視も多く見られた。逆に事例の少なかったもので注目されるのが、〈精神ではなく表現〉（て）である。55年1月論文の言説であり、当時の丹下の建築作品を見ても理解しやすい論旨であるが、その他の機会ではほとんど見られなかった。また、丹下の伝統表現において関連が深いと見られてきた⁸〈「空間」による伝統の把握（空間の無限定性）〉（け）に関する言及も、事例数としては少なかった。

一方、その論旨に変化が見られたものとして、弁証法的創造論に関するもの（①）、創造における建築家と民衆の関係に関するもの（②）、桂離宮論に関するもの（③）が挙げられる。①では、〈伝統と技術／ソーシャル・リアリズムとモダニズムによる対比的理解〉（え）、内的リアリティーと外的リアリティーの統一としての創造（と）、〈表裏一体の関係としての縦の伝統と創造・横の民衆と作家〉（へ）等といった形で、様々な対立する概念の組み合わせや整理のされ方が見られた。②では、〈単に民衆の求めに応じることの否定〉（な）から〈「民衆」の

表 1 分類表

				論 旨		技術的重視																																											
種／工：エッセー、対、対談・座談会記事、作 作品解説文、論、学術論文、著、書 出版／国：国際建築(美術出版社)／読：読売新聞 ／毎：毎日新聞／美：美術手帖(美術出版社)／芸：芸術新潮(新潮社)／新：新建築／東：東京新聞／文：建築文化(数国社)／婦：婦人画報／世：世界美術全集月報(平凡社)／市：市政(全国市長会)／友：婦人之友／奎：奎堂(奎堂舎)／現：現代芸術講座 第1巻(河出書房)／ミ：みづる(美術出版社)／グ：グロピウスと日本文化(彰国社)／群：群像(講談社)／批：美術批評(美術出版社)／首：首都圏(首都圏連合社)／リ：リビングデザイン(美術出版社)／草：いけばな草月(草月会出版部)／人：人物花壇：好きなもの(大日本雄弁会講談社)／ゲ：現代建築1957-58(美術出版社)／主：主婦と生活(主婦と生活社)／実：実業之日本／朝：朝日新聞／中：中央公論(中央公論新社)／桂：桂(造型				伝統と破壊の対比法的統一としての創造論 今そこが下層の基盤的なエネルギーを解放する時とする創造論 世界との相互関係から日本を創る 反社会性／非科学性への懸念 素材の美しさの尊重 平面・構造的な要素明瞭化 円筒・螺旋への共感 創造の主役としての民衆に建築家が●● 欧州にして親近的生活の中で具体的なでない 偏見のないものへへの関心 亦生動的なものに対する伝統理解 解決策提示すべきもの 前進的な立場にいた伝統の自覚 個性的な生活の知恵による典型化の肯定 建文化への意識 表面一対峙する人間の本質 表裏一体の例としての縦の伝統と創造・横の民衆と作家 作家にショックを与えるような創造的意味 作家の内面にあるものとしての伝統理解 身辺の認識がこたえた「生活の知恵」の否定 遺産と対峙する創造に向けての発動としての桂理解 木野の文化と民衆の文化の交錯点としての桂理解 本野の否定と黄金比への関心 ヒトリー・高木の関心 里に民衆の求めに応じることの否定 内的リアリティと外的リアリティの統一としての創造 隣邦ではなくとも 典型的建造と寓の理解の一貫する形をまつこととしての創造 古典的建造と寓の理解の一貫する形をまつこととしての創造		空間の無限可能性 合理的な近代計画からの桂批判 大規模の存在(木野の尊重) 性格の存在(木野の尊重) 合理性・機能を超えた人間的性の追求 伝統と技術／リアル・リアリズムとモダニズムによる対比的理解 風土・状況による各固有の資源であるべき																																											
既往経路で30年代に形成；☆/50年代に形成；★				あ	い	う	え	お	か	き	け	こ	さ	し	す	せ	そ	ち	つ	て	と	な	ぬ	ね	は	ひ	ふ	へ	ほ	ま	み	む	め	ち	ゆ	よ	ら	り	ろ										
No	年	月	種	タイトル／典拠	国	●	●	●																																									
6	1951	7	対	建築学会賞と下関市商會懸賞	国	●	●	●																																									
7	1951	9	工	「機械」と「手」との懸絶（3日）	鉄	●		●																																									
8	1951	9	工	都市の芯（7日）	毎	●		●																																									
9	1951	10	工	ヨーロッパの郷愁	国	●		●																																									
10	1951	12	対	欧米社会と近代建築の潮流	国																																												
15	1952	9	対	建築と絵画の協力について(1)	美			●																																									
18	1953	3	対	国際性・風土性・国民性	国	●		●		●	●	●																																					
参1	1954	1	作	建築のプロトタイプについて	新	●				●	●	●																																					
22	1954	5	対	現代建築	芸			●		●	●	●	●																																				
28	1954	8	工	電安寺の石庭（11日）	東											●																																	
32	1954	12	工	茶の間	毎																																												
33	1955	1	作	住居	新							●																																					
34	1955	1	工	現代日本において近代建築をいかに理解するか	新	●																																											
36	1955	3	対	座談会・近代建築について	文											●			●	●	●	●																											
37	1955	4	対	新しい住宅を語る	婦																																												
38	1955	4	対	日本美術の世界的進出	世			●																																									
39	1955	5	工	近代建築の問題	芸			●																																									
40	1955	5	工	都市 その傳統と進歩	市			●																																									
42	1955	5	工	芸術の定着と統合について	美			●																																									
44	1955	8	工	日本の住居の開口	友			●	●																																								
46	1955	8	工	桂	文																																												
47	1955	10	対	今日の書と芸術を語る	奎																																												
48	1955	11	工	建築と現代芸術	現		●									●				●																													
51	1956	1	作	空間の創造と表現 生活の知恵	文																																												
52	1956	2	対	日本の古典とどう取りくむか	美																																												
53	1956	3	対	伝統をどう克服するか?	新																																												
55	1956	4	工	イタリア現代建築に期待する	新																																												
56	1956	5	対	インドの建築に学ぶ	ミ			●																																									
58	1956	5	対	壁画	芸																																												
59	1956	5	工	電安寺の石庭	グ																																												
60	1956	5	工	グロピウスの残した余韻	グ																																												
62	1956	6	対	古いもの新しいもの	リ																																												
63	1956	6	対	庭の造型	芸				●																																								
64	1956	6	工	現代建築の創造と日本建築の伝統	新											●				●																													
65	1956	8	対	日本の藝術8 建築	群																																												
66	1956	10	工	おぼえがき	文																																												
67	1956	10	工	日本の建築家	新																																												
69	1956	11	対	建築家は民衆をどう抱えるか	批																																												
72	1957	2	工	東京都庁舎	首			●																																									
73	1957	3	対	都都舎への疑問に答える	芸																																												
77	1957	7	対	座談会1・作家という立場からの発言	文	●																																											
79	1957	7	工	麓のなかの現代建築	新																																												
80	1957	7	対	今日を建てる	華																																												
83	1957	12	工	サンパウロ・ビエンナーレ展の焦點	芸											●																																	
85	1958	一	工	建築の設計	人																																												
88	1958	2	工	世界と日本	ゲ																																												
90	1958	2	工	無限のエネルギー：コンクリート	文																																												
98	1958	10	対	草月會館の設計	芸																																												
100	1958	10	工	芸術の創造性について	文																																												
101	1959	1	対	香川県庁舎	新																																												
102	1959	2	対	新しいものは抵抗感から	主																																												
105	1959	4	対	はなしの広場(4)	実																																												
107	1959	4	工	日本の伝統の変革（21日朝）	朝																																												
108	1959	6	対	夢を建てよう	中																																												
参2	1960		工	日本建築における伝統と創造—桂	桂																																												
計					7	1	6	12	3	3	1	2	1	2	1	1	8	3	3	1	1	4	3	2	1	7	2	3	6	1	9	2	2	2	1	8	1	4	5	8	3	2	5	1	1	1	1	3	3

視座への共感（創造の主体としての民衆に建築家が参画）に、③では、〈身辺的認識からでた「生活の知恵」の否定〉（は）から〈健康な生活の知恵による典型化の肯定〉（み）に変化しており、経緯が注目される。よって、次章ではその詳しい経緯を明らかにする。

4. 1950年代の丹下健三の伝統論の変遷

4-1 弁証法的創造論

『国際建築』1951年7月号の「対談・建築学会賞と下関市廳舎懸賞」は、池辺陽との対談であった。近代建築の発展過程について技術重視の立場が示される一方、堀口捨己の八勝館については容認する姿勢が示された。木造建築の解決方法として伝統の方を向いてゆく態度と、新しい近代建築の理念を持ち、近代技術に立脚して将来に向ってゆこうとする態度があり、この二つの極は、建築という一本の線の上に乗っているような気がするとした。これに続くのが、「現代建築の課題 「機械」と「手」との葛藤 マチスと建築を語る」（『読売新聞』1951年9月3日）、「都市の芯」（『毎日新聞』1951年9月7日）、「ヨーロッパの郷愁」（『国際建築』1951年10月号）、対談「欧米社会と近代建築の潮流」（『国際建築』1951年12月号）であり、CIAM第8回会議（ロンドン）出席およびヨーロッパ訪問の感想として述べられている。そこでは、共通して伝統と技術による対比的理解のもと、〈技術の重視〉の主張が見られた。特に『読売新聞』の記事は、後に発表される55年1月論文でも直接引用されており、丹下にとって重要な言説だったと言える。続く、『美術手帖』1952年9月号の「建築と絵画の協力について（1）——住宅と美術——」では、伝統と技術という対比は引き継ぎながら、「現在、世界の建築の中にソーシャル・リアリズムとモダニズムの二つの流れがある」という捉え方を示し、どちらも捨てられない「内部的な矛盾」の中にいるという認識を示している。

同様の対比的理解は、『国際建築』1953年3月号の対談「国際性・風土性・国民性 現代建築の造型をめぐって」でも見られ、ここでは〈技術の重視〉の主張とセットであったが、続く『芸術新潮』1954年5月号の対談「現代建築」においては、〈技術の重視〉の主張が消え、双方の葛藤という形になった。以後、技術重視の主張はしばらく見られなくなった。

一方、先の1952年9月の論考でも見られた内部的なものへの意識は、『新建築』1954年7月号の「フィクションとリアリティについて」での検討を経て、『建築文化』1955年3月号の「座談会・近代建築について」において、内的リアリティーと外的リアリティーの統一としての創造という形で主張された。

大げさに言えば歴史的に形成された自己というものがあるということです。云つてみれば、自己のなかに消化された現実であり、それは芸術創造の方法あるいは技術を媒介と

して存在しているリアリティーである。それを内的リアリティーと呼びたい。芸術の創造は、まずこの内的リアリティーがあつて、それと外的リアリティーとの対決のなかから統一を求めることであつて、たんに外部に民衆が何を求めているかということに頼つて作品ができるわけではない。と僕は考えている。(1955.3／引用文 36-1)

上記の言説から、弁証法的な思考において、新たに、内的な自己と、外的な民衆という対比の構図が生まれていることがわかる。こうした思考は、1955年11月の「建築と現代芸術」(『現代芸術講座』第1巻)において、〈表裏一体の関係としての縦の伝統と創造・横の民衆と作家〉という形で整理された。当然、丹下の位置は「創造」や「作家」の側に重ねられ、「民衆」は外部にあった。

その後、1960年の『桂』論文では、2-1で見たように、上層の文化と民衆の文化との対比として、さらには、〈「縄文的なもの」への関心(弥生的なものとの対比による伝統理解)〉が見られ、〈伝統と破壊の弁証法的統一としての創造論〉が見られた。ここで注目されるのは、対比関係における丹下の位置が変化した点であり、『桂』論文において丹下の位置は、「破壊」、「縄文的なるもの」、「民衆」の側に重ねられた。

4-2 創造における建築家と民衆の関係

55年1月論文において丹下は〈機能・空間・感情の環における典型化の重視〉の考えを示しつつ、次のように書いている。

建築家は、環のなかに入つた、体験者であり、同時に、自らの責任において、環の外にたつた創造者でなければならない。西山卯三氏のいわれるような立場からは、氏のいう民衆の建築の創造も不可能であろう。自己をすてて、現実に着することは必要であろう。しかしそれだけでは何らの創造もありえない。建築家は同時に自己の責任において創造者として、外から現実に衝撃を与えるものでなければならない。わたくしは、このような建築家の実践を通じて、われわれの建築における伝統の創造がおこなわれうと思つている。(1955.1／引用文 34-5)

このように、機能・空間・感情の〈環の外に立ち現実に衝撃を与える存在としての建築家〉のあり方を主張した。『建築文化』1955年3月号では、上記の主張と関連して、前節で見た〈内的リアリティーと外的リアリティーの統一としての創造〉、すなわち内的な自己と外的な民衆の統一としての創造が主張されつつ、〈単に民衆の求めに応じることの否定〉の考えが示

された（4-1 の引用文 36-1 参照）。

上記のような「民衆」の捉え方と異なる主張が見られたのが、『建築文化』1956 年 10 月号の「おぼえがき」および『新建築』1956 年 10 月号の「日本の建築家」である。特に前者では、建築家としてどう民衆を把えてゆくかが論考のテーマとなっており、〈内的リアリティーと外的リアリティーの統一としての創造〉の論旨を引き継ぎつつ、次のように書いている。

建築家は現実の矛盾 — 民衆と建築とのからみあいのなかにおける矛盾 — その矛盾のなかに鬱積して潜在している民衆のエネルギーに、具体的なイメージを提示しようとする態度と問題意識をもって、創造にたちむかうことによって、民衆にむすびつくことができるのです。（中略）こうみてきますと、建築家は、その創造的な構想力によって、はじめて、民衆の求めているものを発掘してゆくことができる应该说よいでしょう。あるいは、建築家の創造的な構想力が、民衆の歴史の創造過程に参画する、といってもよいのではないのでしょうか。（1956.10／引用文 66-3）

このように、建築の創造において、建築家を主体として捉える考えから、民衆を創造のポテンシャルな主体と捉え、そこに建築家が参画するという捉え方に变化した。この経緯については、桂離宮論の発展経過も関連しているものと考えられ、次節以降で見ていく。

4-3 桂離宮論

4-3-1 桂離宮批判と「生活の知恵」

1950 年代初期において、桂離宮への言及が見られた資料としては『国際建築』1953 年 3 月号に掲載された対談記事「国際性・風土性・国民性 現代建築の造型をめぐる」が挙げられるが、まだ丹下の桂論はほとんど成熟しておらず、当時の技術重視の思考を背景に「桂離宮なら桂離宮で、非常にわれわれの合理的な近代精神からから [ママ] 見るとまずいところがありますよ。それをもう一ぺん合理的にアプローチする、ということは残っていると思いますよ」と述べるにとどまっている。『芸術新潮』1954 年 5 月号の対談「現代建築」では、近代建築が目指す空間の流動性ひいては社会への解放性の観点から桂離宮を称賛し、『婦人画報』1955 年 4 月号では、高床への関心から桂離宮に言及している。ようやく丹下らしい桂論が披露されるのが、『建築文化』1955 年 8 月号の記事「桂」においてである。後に『桂』（1960）に結実する計画が進んでいることを明かすと共に次のように書いている。

日本の歴史において上層貴族の文化と民衆の文化がはじめて接触し、そこから広い地盤

にたつた国民文化の伝統がくりひろげられようとしている時代が、この桂をささえている背景なのである。わたくしは、桂を異質ないくつかの文化遺産が継承されて、それが一つの統一にたかめられている姿としてではなく、むしろそのような遺産と対決しながら、新しい国民文化の創造に向つて胎動している姿として考えたいと思つている。
(1955.8／引用文 46-1)

このように、『桂』論文での〈上層の文化と民衆の文化の交錯の姿としての桂理解〉が、論旨としては既にこの時点で提示されているのであり、注目される。磯崎新が指摘する（前掲、2003年の論考）ように、こうした2分法的な建築史の理解の仕方は、太田博太郎による『図説 日本住宅史』（1948、彰国社）に示されており、高床を貴族の住宅、竪穴を庶民の住宅として2つの系統から住宅史を説明しているが、それが交錯したものとしての数寄屋や桂離宮に関する説明は無く、そのような説明は新訂版（1971）で追加されている。桂離宮を貴族的なものと同庶民的なものの交錯から捉えた言説を探索してみると、その例として、『新建築』1955年2月号に掲載された池辺陽の論考「『日本的デザイン』といかに取り組むか」が挙げられる。この論考では、上層文化と下層文化の交錯という観点の他、「私たちは日本の伝統と対決することによって、新たな伝統を生み出して行くことができる」と主張する等、丹下の伝統論への影響があった可能性が指摘できる⁹。

続いて、桂離宮へ丹下の言及が見られる例として1955年11月の「建築と現代芸術」が挙げられ、作家にショックを与えるような力で迫ってこない限り、創造的な要素にならないとしている。さらに、丹下の桂論を捉える上で重要な論考「空間の創造と表現 生活の知恵」が『建築文化』1956年1月号に掲載される。これまでも指摘されてきたワビ・サビ的な消極的伝統観の否定や、それを打ち破るために自然に対抗する人間の力強い意志が重要であることが初めて主張される。前者について、ここでは「生活の知恵」という語を用いて説明している。

わたくしたちが、日本の伝統のなかに見たものは生活の知恵であつた。（中略）この知[ママ]活の知恵というのは、身辺的認識が歴史に濾過されて普遍性にたかめられたものである。それは、自然にたいしても、歴史にたいしても、つねに受身に身辺的に、触覚的に、味的に受入れられた認識から出ている。それがまた民族的な連帯感にまでひろめられてゆくのであるが、しかし、対象にたいする客観的認識や、自然や歴史にたいする抵抗的な意志に欠けているので、その表現には、永遠なるもの、持続するもの、強靱なものを失つており、創造を統一にたかめる抵抗的な緊張がない。（1956.1／引用文 51-1）

『新建築』1956年3月号に掲載されたシンポジウム（1955年12月9日開催）の記録「伝統をどう克服するか？」では、それまでに見られた桂論としての主張、すなわち、〈上層の文化と民衆の文化の交錯としての桂理解〉、ワビ・サビを含む〈身辺的認識からでた「生活の知恵」の否定〉、〈自然に対抗する人間の意志〉の重要性の主張などが語られ、桂を否定的に論じた時期の桂論の論旨が出揃った。

一方、『美術手帖』1956年2月号のインタビュー記事「日本の古典とどう取り組むか」では、縄文文化について言及した注目すべき言説が見られた。

しかしわれわれの現在の出発点になるようなものは、桂にある程度集約されているだろうとおもいます。というのは、歴史的な、客観的な認識からそれが出てくるわけですが、けれども、例えば、われわれのなかに縄文土器時代の強い血が流れているとか、あの時代の伝統がわれわれのなかに生きているとか言うひともあるかもしれないが、そういうふうには言いきれないと思う。（1956.2／引用文 52-5）

このように、『美術手帖』1956年2月号の時点では、縄文文化に懐疑的な見解を示しており、縄文的なものに自身の創造を重ねるような思考に至っていないことが読み取れる。

4-3-2 「健康な生活の知恵」から縄文と弥生へ

まず56年6月論文における桂論を見ておこう。ここでも、前述の上層文化と民衆文化の交錯としての桂理解の言説が見られたが、同論文において注目されるのが、縄文土器について「自然との奔放な戦いのなかから生れてくるような、量感にあふれた強靱な意欲と、自由で敏捷な感受性が現われている」と評し、日本の住居の系譜について、次のように書いている点である。

ここには二つの源流があるように思われる。一つは竪穴式住居であり、それは縄紋の時代からのものと考えられる。そうして高床の切妻型の住居は弥生の時代に現われ、この二つの形式は主として竪穴式のものが下層農民層のなかで発展させられ、高床式のものが上層貴族のなかで承けつがれたと考えられる。（1956.6／引用文 64-3）

丹下の弥生と縄文の対比による伝統理解には、白井晟一の影響が指摘されてきた¹⁰が、丹下は、白井の「縄文的なるもの」より前の1956年6月号の時点で、それに近い内容に言及していることになる。また、56年6月論文では、それまで同様、ワビ・サビを含む〈身辺的

認識からでた「生活の知恵」の否定〉の言説が見られた一方で、その「生活の知恵」なるものに理解を示し、むしろそこに典型化に繋がる積極的な意義を見出そうとする「健康な生活の知恵」なる言説が見られた。このような「生活の知恵」の肯定的言及がそれ以前に見られるのが、『みづゑ』1956年5月号におけるイサム＝ノグチとの対談「インドの建築に学ぶ 民家と近代建築をめぐって」であり、民家について次のように言及している。

歴史的にできてきたティピカルなもの、典型みたいなものであって、それを住む人がほんとうに住みついてそだてているわけですね。インドにしても日本の民家にしてもそういうティピカルなものはどういうものかといいますと、なかにはいつている人の生活を縛りつけないようなものにできている。そういう暮らし方のいろんな変化、暮らし方のいろんなヴァリエーション、そういうものを全部満たしてくれるようなひとつのタイプなんですよ。(中略) 人間が長いあいだ歴史的に生活の知恵みたいなもので作ってきた民家を見ると隣りの家、その隣りの家も同じなのだけれども自由なのです。(1956.5/引用文 56-1)

以上を踏まえれば、上記の対談は、「生活の知恵」の拒否に基づく丹下の桂批判が、変化していく重要な分岐点の一つとして指摘できるのではないだろうか。

さらに「生活の知恵」の肯定的言及の論旨は、次に示す55年1月論文に見られた典型化の過程とほぼ同義であることがわかる。

生活機能——建築空間——生活感情——生活機能という環のなかには、どれを起点としても考えることのできない動的な結びつきがあるのである。(中略) 機能分化から空間の限定化、その結合の仕方における普遍的なものの追求、その究極としての空間の無限定化、という限定＝無限定の輪が成立しはじめているということであつて、そこにわたくしはもつとも大きな期待をよせているのである。過去の、住居、とくに農家や町屋にあらわれたすぐれた典型となつた住居の伝統のなかには、この空間の限定性＝無限定性が、たぐみな輪となつて、生活を包容していたことがよくわかるだろう。(1955.1/引用文 34-3)

この典型化の重視の論旨が「生活の知恵」の概念に合流することで、そこに両義性が生まれた。以降で桂論に新たな展開が見られるのが『芸術新潮』1958年10月号の文「草月會館の設計」である。住居の源流という枠を超え、日本建築ひいては日本文化には上層文化と庶

民文化の二つの系統があるとし、それぞれを「弥生的」「縄文的」という形で表現した。その上で、桂離宮を「下層の系譜の伝統のエネルギーをひきついで、それをもつて歴史の限界ぎりぎりのところまで上層系譜の伝統にぶつつけて行つた」萌しが見える例として積極的に位置付けた。さらに、「今日こそ、上層系譜の日本の伝統（中略）と下層系譜の伝統ののろしとははげしくぶつつかり燃焼しあつて、日本の民族的な文化を創ることのできる時ではないだろうか」とした。

このように、『芸術新潮』1958年10月号の論考では、上層文化と民衆文化、すなわち弥生的文化と縄文的文化の対立的構図を踏まえ、桂を上層文化の抑圧にぶつかった数少ない例として積極的に位置付けた。また民衆文化抑圧の歴史認識と今こそそのエネルギーを解放する時だとする主張が見られ、1960年の『桂』論文で示される桂論の論旨がおおよそ固まったものと理解できる。

4-4 考察

前節までの内容を踏まえ、丹下による伝統論の論旨の変遷について考察する。

丹下の言説に見られた二項対立的な状況理解に基づく、弁証法的創造論は、1950年代を通して見られ、1955年11月の「建築と現代芸術」では、表裏一体の、伝統と創造、民衆と作家という関係に整理されたが、『桂』論文では、上層の文化と民衆の文化、弥生的なもの縄文的なもの、伝統と破壊という形を取り、自身を重ね合わせる対象が、民衆の側にシフトした。その民衆の捉え方の変化を辿てみると、『新建築』および『建築文化』1956年10月号の2論考において、それまでの内的な自己と外的な民衆の統一という弁証法的論旨に、民衆を創造の主体と位置付け、そこに建築家が参画するという捉え方が加わった。

一方、桂論の変遷に着目してみると、『桂』論文に特徴的な言説とみなされてきた、上層文化と民衆文化の交錯から桂離宮を捉える論旨は、既に『建築文化』1955年8月号に見られ、また、その対比に弥生と縄文を関係づける言説は56年6月論文に見られた。そうした中、ワビ・サビ的な消極的伝統観の否定やそれを打ち破るために自然に対抗する人間の力強い意志を重視する桂批判の主張が変化していくきっかけとなったと考えられるのが、その論理基盤としての「生活の知恵」なる概念の変化であり、それまで「身辺的」として否定的に用いられたものが、56年6月論文では、典型化の過程の描写と重なりながら「健康な生活の知恵」として肯定的に扱われた。これと同様な、「生活の知恵」の肯定的言及は『みづゑ』1956年5月号におけるイサム＝ノグチとの対談でも見られたことから、同対談が、丹下の桂論変化における1つの分岐点となった可能性がある。さらに、民衆の捉え方に変化が見られた前述の2論考では、「生活の知恵」の肯定的言及も見られることから、この2論考が丹下桂論

の変化に大きく関わったと考えられ、もう1つの分岐点として指摘できる。

5. おわりに

1950年代の丹下健三の伝統論の展開において、桂論が変化していくきっかけとなったのは、その論理基盤としての「生活の知恵」なる概念の変化であり、それまで「身辺的」として否定的に用いられたが、1956年6月の論考では、「健康な生活の知恵」として肯定的に扱われた。これと同様の言及は1956年5月のイサム・ノグチとの対談記事にも見られることから、同対談が丹下の桂論変化における1つの分岐点となったと言える。さらに、同様の言及が見られた1956年10月の2論考では、民衆の捉え方に変化が見られることから、もう1つの分岐点として指摘できる。

本研究では、丹下健三の言説に着目し、主に論旨変遷の具体的経過を明らかにした。論旨変化の客観的要因の検討、また国内外のその他の建築家の動向を踏まえた総合的な検討については今後の課題としたい。

謝辞

本研究はJSPS科研費JP23K00174の助成を受けたものである。また資料収集において箱崎瑞穂氏の協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

註

- 1 藤岡洋保：伝統論争の歴史、『建築20世紀PART2』，新建築社，pp.78-79, 1991.6。また同論考は、藤岡洋保：昭和30年前後の日本の建築界における「日本的なもの」——「空間」による「日本的なもの」の把握——，日本建築学会大会学術講演梗概集，pp.909-910, 1985.10 および 藤岡洋保：昭和初期の日本の建築界における「日本的なもの」——合理主義の建築家による新しい伝統理解——，日本建築学会計画系論文集，第412号，pp.173-180, 1990.6を基に執筆されたものと考えられる。
- 2 豊川斎赫：丹下健三による桂離宮のための空間論，日本建築学会計画系論文集，第86巻，第782号，pp.1272-1283, 2021.4
- 3 田路貴浩・門脇稔：丹下健三の伝統論 その1，日本建築学会大会学術講演梗概集，F-2, pp.681-682, 2008.7 および門脇稔・田路貴浩：丹下健三の伝統論 その2，日本建築学会大会学術講演梗概集，F-2, pp.683-684, 2008.7
- 4 丹下健三・藤森照信：『丹下健三』，新建築社，2002.9
- 5 表1と別表1の資料は、前掲、註4の巻末資料および国立国会図書館デジタルコレクション、ciniiでの検索結果を参考に、丹下の記名（研究室名義は除く）があるものののみを対象とした。『新建築』1954年1月号の「建築のプロトタイプについて または伝統」には記名はないが、56年6月論文の文末脚註において、丹下自身が参照しているため、参考としてリストに入れた。
- 6 本研究における論旨の分類は、拙稿、1950年から1965年までの吉村順三の著作にみる伝統論に

別表 1 伝統論の見られなかった著作リスト

No	年	月	種	記事タイトル	誌名	発行
1	1950	8	工	平和都市建設の中心課題	新都市	都市計画協会
2	1950	10	論	地域計画の理論 その1	研究報告	日本建築学会
3	1950	10	論	住宅経済の計量的研究 その1	研究報告	日本建築学会
4	1950	10	論	住宅経済の計量的研究 その2	研究報告	日本建築学会
5	1951	4	工	住いの絵本について (26日)	毎日新聞	毎日新聞社
11	1952	3	工	18坪2階建集合住宅競技設計	建築雑誌	日本建築学会
12	1952	4	工	ベニスにて	婦人之友	婦人之友社
13	1952	6	工	マルセーユの総合住宅	科学朝日	朝日新聞出版
14	1952	7	工	建築 絵画 彫刻のレ・コニオン	アトリエ	婦人画報社
16	1952	10	対	建築と絵画の協力について(2)	美術手帖	美術出版社
17	1953	1	工	国立近代美術館に問う	美術世界	美術出版社
19	1953	5	工	インダストリアルデザインと建築	別冊みつゑ	美術出版社
20	1953	10	工	自画像	美術手帖	美術出版社
21	1953	12	工	意識的に改作の規定 (22日)	毎日新聞	毎日新聞社
23	1954	7	対	古い構造を「流行」に仕立てる	国際建築	美術出版社
24	1954	7	工	フィクションとリアリティについて	新建築	新建築社
25	1954	7	作	廣島子供の家	新建築	新建築社
26	1954	7	作	デザインと構造について	新建築	新建築社
27	1954	7	作	愛媛県民館 (松山)	建築雑誌	日本建築学会
29	1954	9	対	クロビウスの日本美術譜	淡交	淡交社
30	1954	11	工	「壁書」による構成	デザイン系系刊	ダヴィッド社
31	1954	11	工	シンのあるアパート設計を	読売新聞	読売新聞社
35	1955	2	対	アヴァンギャルドとリアリズム	美術批評	美術出版社
41	1955	5	対	養胎茶會 茶會	淡交	淡交社
43	1955	7	作	図書印刷原野工場を受賞にさいして	建築雑誌	日本建築学会
45	1955	8	作	広島計画の中間報告として	建築文化	彰国社
49	1955	12	対	東京の都市計画 (18日朝)	読売新聞	読売新聞社
50	1956	1	工	5万人の廣場	芸術新潮	新潮社
54	1956	4	工	現代建築の健康さ (2日朝)	朝日新聞	朝日新聞出版
57	1956	5	対	1956年度 USカメラ年鑑をめぐって	アサヒカメラ	朝日新聞出版
61	1956	6	対	会場を設計して	カメラ毎日	毎日新聞社
68	1956	10	工	問答有用 (2日)	週刊朝日	朝日新聞出版
70	1957	1	対	どのように国立劇場を設計するか	国際建築	美術出版社
71	1957	1	工	人間性の解放 (3日朝)	読売新聞	読売新聞社
74	1957	5	対	現代建築の反省	芸術新潮	新潮社
75	1957	5	工	技術と思想と感性	美術手帖	美術出版社
76	1957	5	工	トリエンナーレに参加して	建築文化	彰国社
78	1957	7	作	倉吉市庁舎についておもうことなど	建築文化	彰国社
81	1957	7	工	高層アパートとマンモス・ビル時代	美業の日本	美業の日本社
82	1957	9	対	池袋に計画を	国際建築	美術出版社
84	1957	12	工	あなたも批評家	アサヒカメラ	朝日新聞出版
86	1958	1	工	都市計画家の確立	建築雑誌	日本建築学会
87	1958	1	対	世界美術を動かす12人	芸術新潮	新潮社
89	1958	2	対	時代に取り残される官庁営繕	建設月報	建設広報協議会
91	1958	2	工	明日にそなえる都市像 (14日朝)	朝日新聞	朝日新聞出版
92	1958	3	工	(建築教育に対する70氏の意見)	建築雑誌	日本建築学会
93	1958	4	工	現代の建築	会誌	板木建築士会
94	1958	4	対	三界に住いあり	中央公論	中央公論新社
95	1958	6	作	都庁舎の構築	新建築	新建築社
96	1958	6	作	舞臺装置感女作	芸術新潮	新潮社
97	1958	8	作	市民の廣場 一 香川縣廳舎	芸術新潮	新潮社
99	1958	10	対	皇月会館	国際建築	美術出版社
103	1959	2	工	積み重ねつつ高きにのぼる(20日)	日刊建設通信	建設通信社
104	1959	2	対	モデューラ・コーディネーション	建築雑誌	日本建築学会
106	1959	4	工	高度制限の解除と容積コントロールを提案する	毎日新聞	毎日新聞社
109	1959	6	工	舞臺装置のごころみ	民芸の仲間38号 / 芸団民芸	
110	1959	6	工	演劇的空間に於ける異質な二つの系譜	現代演劇講座月報VI / 三笠書房	
111	1959	7	工	都市再開発には建築の高度制限の解除が必要である(東京)	東京商工会議所	
112	1959	10	対	デザイン各分野の独立と総合	デザイン	美術出版社

別表 2 引用文リスト

引用文	掲載箇所	分類	56-2	p.10,右,1.13~1.19	み
6-1	p.52,左,1.5~1.10	あ	56-3	p.13,右,1.27~1.29	え
6-2	p.52,右,1.7~1.15	い	56-4	p.12,左,1.27~1.35	ほ
6-3	p.53,中,1.3~p.54,左,1.29	う	58-1	p.96,上,1.24~中,1.5	は
7-1	p.4,5段目,1.30~1.47	あ,え	58-2	p.96,中,1.9~1.21	ほ
8-1	6段目,1.16~1.20	あ,え	59-1	p.161,1.16~1.24	す
9-1	p.11,中,1.14~1.25	あ,え	60-1	p.376,1.19~1.21	し
10-1	p.6,下,1.1~下,中,1.14	あ,え	60-2	p.381,1.6~1.14	と
15-1	p.37,下,1.8~1.15	お	62-1	p.8,下,1.3~1.7	は
15-2	p.43,下,1.23~p.44,下,1.10	え	62-2	p.10,下,1.10~1.18	ほ
18-1	p.3,中,1.34~p.4,左,1.14	あ,え	62-3	p.11,中,1.7~下,1.6	む
18-2	p.6,下,中,1.15~p.11,下,左,1.12	か	63-1	p.170,上,1.20~中,1.5	は,ほ
18-3	p.13,中,1.3~右,1.4	き	63-2	p.178,下,1.4~1.12	お
18-4	p.13,右,1.13~1.18	く	64-1	p.29,下,1.36~1.42	む,め
21-1	p.12,1.9~p.13,右,1.11	あ,か	64-2	p.30,上,1.14~右,1.15	と
22-1	p.168,下,1.21~p.169,上,1.8	え	64-3	p.31,上,1.38~1.42	ち
22-2	p.173,中,1.14~1.28	け,こ	64-4	p.33,右,1.27~1.46	な,は
22-3	p.174,上,1.12~1.22	さ	64-5	p.36,上,1.44~右,1.2	た,み
22-4	p.175,中,1.5~1.14	し	64-6	p.36,中,1.9~1.23	ち
22-5	p.176,上,1.11~中,1.25	き	64-7	p.37,上,1.39~1.56	し
28-1	p.8,7段目,1.39~1.45	ず	65-1	p.178,中,1.13~1.24	は
32-1	下,1.14~1.24	せ	65-2	p.179,中,1.2~1.19	や,ひ,め
33-1	p.27,1.4~1.18	け	65-3	p.182,中,1.19~下,1.2	わ
33-2	p.27,1.20~1.43	そ	65-4	p.185,下,1.5~1.13	し
34-1	p.15,左,1.13~1.19	え	66-1	p.22,上,1.10~1.18	み
34-2	p.15,右,1.2~1.4	け	66-2	p.23,中,1.24~1.29	と
34-3	p.15,右,1.29~p.16,右,1.15	た	66-3	p.23,右,1.8~1.36	ゆ
34-4	p.18,上,1.18~1.30	ち	67-1	p.7,上,1.30~p.7,右,1.4	む,め
34-5	p.18,右,1.42~1.49	つ	67-2	p.7,下,1.14~1.20	み
34-6	p.18,右,1.49~1.53	て	67-3	p.8,上,1.29~1.41	ゆ
36-1	p.28,右,1.54~1.63	と	69-1	p.98,上,1.19~下,1.13	ひ
37-1	p.162,3段目,1.3~1.14	に	72-1	p.31,下,1.8~1.17	う
37-2	p.163,4段目,1.3~1.11	た	73-1	p.249,中,1.5~1.23	ろ,ら
38-1	p.2,中,1.14~1.22	し	77-1	p.27,1.57~p.28,左,1.4	め
38-2	p.2,下,1.13~p.3,上,1.1	う	77-2	p.28,上,1.38~中,1.1	あ
38-3	p.23,上,1.19~下,1.12	ず	79-1	p.11,上,1.14~中,1.9	ぬ
39-1	p.71,下,1.27~p.72,上,1.5	ろ	80-1	p.21,1段目,1.14~1.18	と
40-1	p.51,下,1.17~p.52,上,1.8	え,う	80-2	p.23,3段目,1.20~1.27	め
42-1	2頁目,1.1~8頁目,1.29	え	80-3	p.25,2段目,1.24~1.29	し
42-2	8頁目,1.12~1.17	ぬ	83-1	p.58,下,1.9~1.13	ゆ
44-1	2頁目,1.1~1.6	お	83-2	p.60,下,1.9~p.61,上,1.8	や,あ,お
44-2	3頁目,1.9~1.11	え	85-1	p.25,1.5~1.11	ち
46-1	p.42,1.2~1.7	な,お	88-1	p.151,右,1.8~1.19	り,る
47-1	p.34,下,1.16~1.19	は	90-1	p.23,右,1.30~1.41	ぬ
48-1	p.56,1.15~p.57,1.11	う,と	98-1	p.211,上,1.5~1.16	ち
48-2	p.63,1.15~p.64,1.4	し	98-2	p.211,中,1.6~1.15	ね
48-3	p.67,1.3~1.7	ひ	98-3	p.211,中,1.20~1.25	れ
48-4	p.67,1.14~p.68,1.10	ふ	100-1	p.11,1.42~1.48	ろ,ゆ
48-5	p.72,1.4~1.11	つ,へ	101-1	p.85,1.5~1.7	ろ
51-1	p.8,左,1.2~1.11	は	101-2	p.85,1.22~1.30	な
51-2	p.8,右,1.4~1.13	ほ	101-3	p.85,1.31~1.39	れ
52-1	p.25,下,1.10~p.26,上,1.3	と	102-1	p.138,3段目,1.15~4段目,1.6	や
52-2	p.26,下,1.13~p.27,上,1.28	ね	105-1	p.53,1段目,1.16~1.25	め
52-3	p.27,下,1.5~p.28,上,1.15	は	105-2	p.53,4段目,1.8~1.18	は
52-4	p.29,下,1.10~下,1.27	な	107-1	p.7,3段目,1.2~4段目,1.4	ち
52-5	p.30,下,1.7~1.15	ま	107-2	p.7,6段目,1.9~1.24	れ
53-1	p.72,上,1.22~1.27	ね	107-3	p.7,7段目,1.12~1.23	ろ
53-2	p.72,右,1.1~1.21	は	108-1	p.288,中,1.19~1.25	ろ
53-3	p.72,右,1.21~1.28	ほ	108-2	p.46,右,1.16~p.48,左,1.5	や,ち,う
55-1	p.74,中,1.14~右,1.12	ほ	108-3	p.48,右,1.27~1.31	れ
56-1	p.4,左,1.5~1.23	た		右,左,上,下,上は段を示す	

について、デザイン理論、74号、意匠学会、pp.67-80, 2019.8を参考に、KJ法によって行った。

- 酒井禄也・羽藤広輔：1950年代の池辺陽の著作にみる伝統論，日本インテリア学会論文報告集，第31号，pp.101-108, 2021.3等，同報告集第31～34号における筆者の一連の論文による。
- 前掲註1，1985年の藤岡論文が該当する。
- 前掲註7，酒井・羽藤論文でも指摘した。
- 前掲註3，田路・門脇論文等が該当する。

The Transition of the Theory of Tradition in Kenzo Tange's Written Works in the 1950s

HATO, Kosuke

This study clarifies the transition of Kenzo Tange's theory of tradition in the 1950s. The way of understanding for Katsura Imperial Villa, known as the theory in the photo book "Katsura," which views the Katsura from the intersection of upper-class culture and popular culture, can already be seen in the August 1955 issue of "Kenchiku Bunka." Also, the discourse relating Yayoi and Jomon to this contrast was seen in the June 1956 text. Under these circumstances, what triggered the change in Katsura's critical argument was a change in the concept of "wisdom for life" as its logical basis. Until then it had been used negatively as "Personal things," the June 1956 text treated it positively as "healthy wisdom for life." A similar reference was also seen in the conversation with Isamu Noguchi in the May 1956 issue of "Mizue." It is thus possible that this conversation was a turning point in Tange's change in Katsura theory. Furthermore, the two essays published in October 1956, in which similar references were made, could be called another turning point, because of the marked change in his perception of the "people."